

◇これを書いているのは、平成二十五年十一月十二日です。例年早目に年末年始の準備を始めるのですが、今回は特に早い。暮れの十二月二十四日に近在の和尚様方二十名ほどをお呼びして、先住職の七年忌法要を営むので、その前後は正月支度などしてられない。だから、早目に書いています。

◇年忌法要は無理せず、都合のよい日にやるのが良いのですが、師父の命日は十二月二十六日。今回は導師をしていただく平林寺老師の都合もあって、祥月命日に近い日に法要ができません。クリスマスイブは関係ないけれど。来ていただくご住職がたにもご迷惑。申し訳ないことです。◇先住職は自分の思いを、相手

が誰であろうと口に出してしまふ人でした。叱られた経験のある檀家さんも多いと思います。檀家さんばかりでなく、教団内でもそうでした。高齢になってからは耳が遠くなって、なおさらでした。それを「老害」と非難した教団の重役の方もおられました。そんなふうな晩年の先住をころよく思っていないであろう重役の一人に、先日お会いしました。その方がおっしゃいました。「近ごろ

間違い探しゲームというのがあります。絵や写真を見て、変なところを探すゲームです。現在は知らないけれど、我々の世代の知能検査にも、同様のものがあつたような記憶があります。そこで、午年ですから、下の馬の絵を見て、変なところを探してください。

絵が不鮮明なのはお許ください。なにしろ、三七〇年も前に描かれたものが本に載っています。それをコピーしたものですから。

絵が不鮮明でも、間違いは明らかです。馬の進行方向に背を向けて、乗馬しています。

でも、これは間違いではありません。絵を描いている人も、馬に乗っている人も、信念にしたがって、真面目に進行方向に背を向けているのです。

この奇妙な絵を描いているのは、白隠禪師（一六八五〜一七六八）です。白隠さんといえば、法要の時などに「一緒によむ『坐禅和讃』の作者



編集後記

は禅博和尚のような気骨のある方がおられなくなつて寂しいよ。お世辞半分としても、六年の日々が「老害」を「気骨」へと昇華させてくれました。思い出のトゲがとれて、無害になる頃に営むのが七年忌なのでしょう。◇七年忌といえば、十月十一日付け読売新聞「人生案内」欄に八十歳代のご婦人の次のような投書が紹介されていました。「五年前に二十代前半の孫娘を事故で亡くしました。毎年祥月命日になると同級生たちが家に来てくれます。気持ちがありがたいのですが、(略)同級生たちが帰った後「生きていてくれたら」と思い、娘は数日落ち込みます。(略)もう、このあたりでうちきつてほしいのですが、どうやってよいものか悩みます」。これに対して、スポーツ解説者の増田明美さんが、次のようにアドバイスしています。「来年は七回忌を迎えられますね。これを一区切りにして、心の中で手を合わせてくれるとうれしいです、と同級生に言うのがよいのでは。あつぱれな回答です。同じような質問を私に投げかけられたら、なんと答えるだろうか」と頭を抱えてしまいます。年忌法要も正月も、日常の繰り返しです。(住職記)

す。しかも、この絵の賛(添え書)によれば、乗馬しているのは熊谷次郎直実だということです。京都にいた直実が、東方の鎌倉へ行く時に、仏さまのおられるという西方に背を向けまいとして、さかしまに乗馬したというのです。直実の和歌が伝えられています。

「浄土には剛の者とや／さたすらむ／西にむかひて／うしろ見せねば」
極楽浄土に、直実は熱心な仏教信者だと伝えて

欲しい、とでも現代語訳すればよいでしょうか。あるいは、人がみんな東へ行ったとしても、自分が信するならば違う方向を見つめるんだよという警告でしょうか。人の後ろについていくのが好きで卑品(ヒビーン)な私たちへの、ウマ頭のいましめに思えるのです。

連続シリーズ「見つけた」

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」



「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にもどこかあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

暮れにお届けした新年祈禱法要のご案内で、昨秋京都にのこる冷泉家のおやしきを拝観したことを書きました。本山妙心寺の微笑会が企画する「信を深める旅」に参加したのです。

冷泉家のご先祖は百人一首を編集した藤原定家。それ以後、八百年間にわたり途切れることのないお公家さんのおやしきが、京都御所の北方に現存しています。普段は門を閉ざしている文化財を拝観するのだから、何冊かの参考資料で予習しました。その中に次のような一節がありました

「我が家の仏壇の香盤下の刺繍をほどきた打敷は、曾祖母の着物でこしらえたものです。その後ろにある朱色の打敷もやはり、曾祖母の着物で作ったもの、と裏に書いてございます。京都では家人が亡くなると生存在に着ていた着物を打敷にするという習慣がございます。私もでは同じものを二枚作り、一枚は菩提寺の真如堂に納め、一枚は家で使うと書き残されております。」(『冷泉家の年中行事』集英社刊より)



新しい戸帳の一部

開かれました。その時にも豊臣家由来の着物(小袖)を仕立て直した打敷が展示されていて、色気のない展示物の中で異彩を放っていた記憶があります。ところで、松岩寺の本堂正面にも、昨秋から新しい戸帳(とちよう)を飾りました。広辞苑で戸帳をひくと、「神仏を安置した前に懸けたとばり」と説明してくれまます。神さまや仏さまが、むきだしになるのは恐れ多いから、少しばかり隠す幕のことです。新しい戸帳を作ってくださいましたのは、檀家の大家恒子さんです。ご自分の手でいろいろな布を縫い合わせて、二幕をパッチワークで作ってくださいました。

打敷というのは、三角形や四角形の金襴・錦の布で本尊さまや仏壇を飾るものです。先年、妙心寺をつくられた無相大師の六百五十年遠忌を記念して「妙心寺展」が東京上野の国立博物館で

春に松岩寺で、「布遊び展」を開いてくださったのが縁です。作品を見て、失礼だけど「これは使える」と直感しました。もちろん、妙心寺展で見たお姫様の小袖を仕立て直した打敷の記憶がありました。お願いしてから待つこと一年半。催促するわけにもいかないので、じっと待っていました。ことのほか時間も費やしたのは、お弟子さんに手伝ってもらったとせず、おひとりで作ったから。形だけでなく、心のこもった荘厳になりました。本堂にお参りする時に、見つけて！